

カンボジア便り

東日本大震災のお見舞いと影響について

はじめに、3月11日に東日本を襲った大震災により多くの尊い人命が失われたことに、深く哀悼の意を表させていただきます。また、当会の支援者の皆様のご無事とご健康を心よりお祈り申し上げます。

大震災は当会の活動にも少なからず影響を及ぼしましたが、ほどなくスタッフの無事は確認できました。

また、カンボジアでも日本の震災については大きく報じられており、リティさんを初め、多くの方からお見舞いの言葉をいただきました。このニュースレターでもお伝えしますように、日韓アジア基金では震災チャリティコンサートを開催しました。今後も当会として何かできることがないか検討を続けていきたいと思ひます。

新しい学校で識字教育支援を行います

今回お伝えできる一番のニュースは、新たな識字教育の支援が始まることです。



識字教育のクラスを視察するリティさん

昨年から洪水被害に対する支援を検討していく過程で、プノンペンからワットハー小学校へ行く途中にある、**Prekchrey**小学校の地域で、親たちの強い要望から識字教育の授業が行われていることがわかりました。(学校の発音は分かりません。当会では支援学校の数が増加したことにともない、便宜上、ルセイサン小学校とワットハー小学校以外の学校に番号を振り把握することにしました。

Prekchrey小学校は「学校No.9」としています)

～目次～

カンボジア便り	1
東日本大震災のお見舞い	
新しく識字記事教育支援を	
新学期に向けて教科書の補充	
ルワンダを訪ねて	4
卒業を迎えて	5
監事退任のご挨拶	6
震災支援コンサート	7
事務連絡	8

この地域はルセイサン小学校・幼稚園地域と似た状況にあります。多くが他の場所から移ってきた貧しい家庭です。



校長先生が教えている授業の様子

カンボジアでは公立学校でもわずかながらお金がかかるので、このような家庭では子どもを学校に送ることができません。子どもたちは家計を助けるために、ゴミ処理場でゴミをあさったり、釣りをしたりしているのが現状のようです。

そんな中で、親たちから子どもをせめて文字が読める

ようにしてやりたいという声があがり、学校No. 9の校長が民家の一部を借りてボランティアで識字教育を始めました。5歳から12歳の子ども約30人を二つに分け、二クラスを同時に校長自身が教えています。写真にある机などの備品も校長が学校No. 9から持ってきたものです。

リティさんとの話し合いの中で、校長はこのような状況を大きく改善したいと考え、正式に当会に支援の依頼をしてきました。校長は、自分のほかにもう一人先生を採用してクラスを完全に二つに分けることを検討しており、そうすれば子どもの数はもっと増えるだろうと予想しています。

具体的な要望としては、場所を提供している家主への

家賃支払い、二クラ

スに分けるための間仕切りの取り付け費、新たに採用する先生の給与、教科書



子どもの姿はどこも同じ

や文房具の購入費などがあります。



教室は民家の一部の間借りです

このクラスが、以前から支援しているルセイサン幼稚園の状況と大きく異なるところは、繰り返しになりますが、子どもに文字を覚えさせたいという親の願いからクラスが始まっていることです。そのため、校長一人で何とか運営している今の状況でも、**30人以上**の子どもが集まっています。**30人以上**という数は、ルセイサン幼稚園に対して通園バスの支援を行っていた時の数に匹敵するレベルです。

当会としては、活動の原点である識字教育支援を本格的に行う非常に良い機会だと考えており、前向きに支援していく方針です。費用対効果も十分に検討した上で、できるだけ早く支援をはじめめる予定ですので、次のニュースレターでは、また改めて成果のご報告ができると思っています。

新学期に向けて教科書の補充の準備をしています

カンボジアの現地スタッフ、リティさんは、昨年から体調が思わしくなく、今年**2月**には勤務中に失神して病院に運ばれた後、数日間入院し、その後しばらく静養していました。

現在は、病院に定期的に通い薬を飲んでいますが、基本的には毎日仕事をしており、当会の活動が途切れてしまう事態には至っていません。今後しばらくの間、リティさんの体調に配慮しながら、教科書支援を行ってきた既存の**11校**に対しての教科書補充と洪水被害に関連する支援を、引き続き進めていきたいと思っています。

また、リティさん一人に大きく依存している当会のカンボジアでの活動についても、必要な対策を準備していかなければならないと考えています。(市井)

私は、アフリカ・ルワンダで、内戦で体に障害を負った人々の生活をサポートする現地 NGO で、2010 年 10 月から 12 月までの 3 カ月弱、ボランティア活動を行いました。「まりは、家族いるの?」「両親はいるの?」—現地の人達は、私の心をチクリと刺す質問を時折ぶつけてきたのが今でも忘れられません。

アフリカ・ルワンダでは、1994 年国内の民族（ツチ族とフツ族）の対立により「隣人が隣人を殺し合う」大量虐殺が起きました。100 日の間に 100 万人が殺されたと言われ、UNICEFF の報告では国民の 99.9%が暴力行為を目撃したとされています。



現地の人々と接することで、内戦のことや彼らの現在の生活について、自分の目で学びとりたいと思い訪問しましたが、ジェノサイドのことについて何も話してこない彼らに対し、正直私には、当時のことを聞く勇気がありませんでした。家族を殺された人や、実際にレイプされた人などがたくさんいたからです。普段陽気にしている彼らですが、明るいエネルギーの裏には、

深い閉ざされた悲しみがあるのだと日々感じていました。

一番今でも心に残っているのは、内戦を生き抜いた、若いルワンダ人自身が、「傷ついた人のために何かしたい、自分の国を復興させていきたい」と自発的に活動していたことです。

中でも、私と年もさほど変わらない画家たちとの出会いは、今の私にも影響を与えてくれました。2010 年、25 歳の男性画家・バクンジが中心となりギャラリーを立ち上げました。

「芸術は人の心、体、精神を癒していくのだ」という理念の下、若手作家中心に活動しています。

家族を失った画家たちや孤児が集まって絵を描き、お互いの心を豊かにしているのです。私自身、施設全面に掲示されている絵を見て鳥肌が立ちました。—そして、絵を日本に持ち帰る決意をしました。帰国後は、どうにかして彼らの情熱、メッセージあふれる絵を日本で広めたいと活動しています。遠く離れたアフリカと日本をアートによって繋げ、両者の架け橋となっていきたいです。



日韓アジア基金とともに過ごした学生時代

——卒業に当たって

浅野麻里

大学2年から日韓アジア基金で活動した3年間を振り返ってみると「行動」のひとつことに尽きる気がします。東南アジアへのスタディツアーに参加して知り合った仲間の優秀さ、行動力に圧倒され、大きな刺激を受けた大学1年の春休み。このときから、とにかく動いてみようと思えました。

「日韓協働」—多くのNGO／NPOがある中で、日韓アジア基金のこの理念に心を打たれました。スタディツアーで中国人や韓国人の仲間と出会ってから、彼らとの関係について考えるようになっていたためです。勇気を振り絞って門戸をたたくと、社会経験も豊富な優秀な方々ばかり。幅広い年代や国籍の違うメンバーとの協働事業—多様な価値観を持つ人達が、互いの在り方を尊重し合い、協力し合い活動していることを知りました。活動スタッフとして、ビビンの会リーダーや事務局長に挑戦しました。特に事務局長については、自分がやって本当に大丈夫だろうかと不安になることもありました。必死で食らいつくような時期もありました。それでも、少しの後悔もなく「挑戦してよかった」と思っています。なぜなら、行動したことで得たものばかりだったからです。

たしかに、初めてやることには失敗がつきまといえます。無理かもしれないと思う瞬間があります。しかし今では、行動しないより、行動して失敗したほうがずっと学ぶことが多いと分かりました。そして仲間と共に苦労し、うまくいったときの大きな達成感も知りました。忘れてはならないのは、私が最後までやり遂げることができたのは、日韓アジア基金のスタッフがいてくださったからこそ、ということです。至らない私を決して否定することなく受け入れ、全力でサポートして下さった、当会のスタッフがいたからこそだと思っています。当会に入っていなければ、私の大学生活は全く違ったものになっていたことでしょう。感謝せずにはいられない気持ちです。

余談ですが、私は当会の活動によって、学業にも相乗効果があったと感じています。というのも、フィールドに出て行動していると、大学で講義を受け、本を読み、レポートを書くのもずっと面白く感じるようになるのです。知識をつければフィールドに出たときに、幅広い視点で物事を見られる、そして知識とフィールドが結びつくと、自然にその知識が頭の中に吸収されていきます。これは、私が後輩に強調して伝えていることのひとつです。

日韓アジア基金で身につけた「行動力」と「吸収力」をもとに、謙虚な気持ちで学び続け、将来日本、そして世界の役に立っていきたいです。本当にありがとうございました。

監事退任のご挨拶

菊池礼乃（きくちあやの）

皆様、平素より日韓アジア基金をご支援くださってありがとうございます。私は、当会が 2005 年に特定非営利活動法人（NPO 法人）として成立、発足して以来、これまで監事として活動に関わってきましたが、今年 2 月の定例理事会をもちまして、この職を退任することになりました。私がこの大役を務めることができましたのも、ひとえに皆様のご協力のおかげだと思っております。長い間、本当にありがとうございました。



私事ですが、今年 3 月より公益社団法人シャンティ国際ボランティア会に就職しまして、タイ、ミャンマー国境にある難民キャンプでの教育支援活動に携わることになりました。現在は、タイ、ミャンマー国境の事務所で働いています。

私が、このように国際協力、特に教育支援の分野で働いていきたいと強く思うようになったのは、日韓アジア基金での経験があったからだと思っています。

日韓アジア基金に出会ったのは、まだ大学生だった 2003 年にさかのぼります。国際協力に漠然と関心を持っていたあの頃、大学内で開催されていた NGO 説明会に参加したのがきっかけでした。私が日本人と韓国人の両親を持っているという背景もあり、「日韓の若者が協働して助けを必要としているアジアの人びとに対して支援を行っていく」という活動理念に強く共感したのを覚えています。

その後、2004 年にカンボジアを訪問し、当時当会で運営していた識字教育学校、アジア未来学校の教室で子どもたちが元気な声で目を輝かせてクメール語の「あ、い、う、え、お」の文字を読んでいる姿を見て、この教育支援活動が子どもたちの将来に向けた大きな一歩になるのだと実感し、活動の重要性を再認識すると共に、自分の一生の仕事として国際協力、教育支援活動に関わっていきたいと思うようになりました。

ちょうど今年は、創設者である禹守根氏によって 2001 年に団体が作られてから、10 周年目。この 10 年間に、カンボジアの子どもたちの教育をめぐる環境も少しずつ改善され、日韓関係も密になり、会の組織も成熟してきているように感じています。私が監事となった 2005 年以降も、日韓アジア基金の活動は現地のニーズに応え少しずつ変化し、アジア未来学校等の識字教育支援活動から、公立学校の体育施設や幼稚園の建設、公立学校への教科書支援と、活動の幅を広げてきています。

特に近年は、もう一度「日韓」に着目し、ビビンの会を始めとした日韓交流会にも積極的に取り組むようになりました。その一方で、教科書が手に入らないカンボジアの子どもたち、日韓の歴史的な壁、組織としての更なる成熟等、まだ課題もたくさんあると思いますので、今後も日韓アジア基金がご支援者の皆様と手を取り合って、活動を充実させてほしいと心から願っています。

今回、監事の職を退任させていただくことになりましたが、今後は一会員として、また日本に帰国した際には一ボランティアスタッフとして、会の活動を支え、盛り上げていければと考えております。私の退任後も、引き続き荒川が会の監事を務めさせていただきますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

～韓国ポペラの響きを東北へ

あたたかくかっこいい **DID** チャリティーコンサート～

東北関東大震災が起きて日本中に激震が走りました。毎日、テレビでは地震と津波の恐ろしい映像が流れ、日本に住む多くの人の心と体に緊張が襲ったことと思います。海外メディアでも、その映像が流され、多くの国から支援の手が差し伸べられました。自分たちにできること。誰もが考えたことでしょう。いつもお世話になっている大澤さんから急にコンサートをすることになった、韓国から震災支援のために自費で来日された素敵なアー



ティストの方たちがおられる、と伺い、ぜひ行ってみたい！と思いました。実は、日韓アジア基金のイベントに参加させていただくのは初めて（ごめんなさい！）、しかも、KJ MUSICです。韓国で人気のポペラのトリオ「D I D」の生演奏、なんだかわくわくします。一緒に働いている仲間を誘って参加させ

ていただきました。

ポペラとは、ポップスとオペラをミックスした新しいジャンルの音楽で、韓国ではとても流行っているようですが、私は初めて聞いた名前でした。でも、コンサートが始まって、本当にびっくりしました。やさしいメロディに、すばらしい声量、室内で行うのがもったいない、屋外で多くの方に聞いてほしい、と思うような本格的な歌声です。サンドアートという、砂絵の映像がまた癒しを感じさせてくれます。黒いスーツに身を包んだイケメン3人の男性アーティストさんたちとも、とっても近い距離でお話を伺ったり、音楽を楽しめる、一緒に写真も撮れちゃう。手作りのあたたかいチャリティーコンサートは、日韓アジア基金のイベントならではの心地よさ。韓国からの留学生で、歌声に惹かれてうれしくなって会場に来ました、という方も。震災は多くの不幸を生み出しましたが、その中から、新たな出会いや暖かい気持ち



ちに気付かせていただく機会にもなっているようです。彼らの暖かい歌声とメロディが、日本の私たちを癒し、募金とともに被災地の方たちに届く、すばらしい企画をありがとうございました。

株式会社ソノリテ 江崎礼子

事務局より

当日頂いた募金3万余円は、在日本大韓民国民団の「東日本大震災民団義捐金」に寄付し、在日・在住韓国人の被災者と各地方自治体に贈られます。

また、アジア文化会館様には、会場・機材を無料でご提供頂きました。篤く御礼申し上げます。

認定NPO法人を申請中です

寄付をなさった方が所得税の優遇を受けられる「認定NPO法人」の資格を、3月末に国税局に申請しました。

民主党政権になって、この資格が取り易くなったので申請したものです。

遅くも9月末までには可否の結論が出ますので、その折には改めてご報告します。

当会イベントにボランティアスタッフとして参加下さった方(敬称略・五十音順)

2月13日 ニュースレター36号 発送作業

鶴飼裕未・北澤裕介・北村宏大・コウウヒョン・齋藤桃子・佐々木望・須永茉里・中内彩香・宮下修・ユージミン・吉田志穂

2月19日 文京国際フェスタブース要員

新井利延・伊東慈子・伊藤里佳・宮下修

2011年1月15日～2011年5月27日に会費・ご寄付を下された方

敬称略・五十音順(別枠除く)

油谷 友加	小川 英	黒巢 香	高木 桂子	古川 かおる	峯村 公雄
磯尾 彊一	金澤 潤子	小林栄次郎	田中 節子	星 光雄	山根 寛
岩見 豊子	菊池 礼乃	柴田 義之	樋口晴太郎	松田 明美	吉田美夏子
王 嶺	菊池 貞子	曾根 文子	樋口 督水	松田えり子	四方田千尋
大西 直美	工藤 早苗	高木 修	平塚 千尋	満井 啓二	鹿 和 会

ボランティア 野菊の会

ご入会・ご寄付のお願い

活動会員:年会費 5,000円(学生、未成年者 2,000円)
賛助会員:年会費1口5,000円(学生、未成年者 1口2,000円)
法人会員:年会費1口10万円
ご寄付:2,000円以上おいくらでも

<郵便振替口座>

口座番号 00180-2-25153
口座名 日韓アジア基金

・活動会員:活動に積極的にご参加頂ける方。総会での議決権があります。

・賛助会員:定期的にご支援頂ける方。

ご支援下さった方には「日韓アジア基金ニュースレター」をお届けします。

<お問合せ先> (日本語でお願いします)

〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-13 アジア文化会館(ABK)内

Tel:090-4456-2942(庶務・会計担当 大澤) FAX:03-3946-7599(ABK)

E-メール: ilaf@iloveasia2.sakura.ne.jp

HP: 検索サイトで「日韓アジア基金」で検索なさってください。

発行人 特定非営利活動法人 日韓アジア基金・日本 代表理事 江本 哲也